



# SPODフォーラム2025

学生が安心して  
学びに向き合う大学の基盤づくり

## シラバス

日程：2025年8月27日（水）～29（金）

会場：徳島大学常三島キャンパス

主催：四国地区大学教職員能力開発ネットワーク（SPOD）/徳島大学



## 組織外コミュニティが促す大学職員のキャリアと能力開発への影響

山田 尚彦(新潟大学 総務部 専門幹(事務職員高度化、研究開発マネジメント人材制度担当))

満田 清恵(中京大学 教学部教務センター豊田オフィス 係長)

野田 智子(神戸大学 企画部企画課 課長補佐(兼)医学部新研究科等設置準備事務室長)

大竹 秀和(立教大学 教務部学部事務 5 課(コミュニティ福祉学部担当) 課長補佐)

### 講師略歴

【山田尚彦】昭和61年長岡技術科学大学に採用された後、平成2年に新潟大学に転任。人事課、研究推進課等に在職し、広報室長、総務課長等を経験した後、自然科学系事務部長を経て令和7年4月から現職。長年、学内で事務職員の研修の企画・実施をはじめとする人材育成業務に関わりながら、平成30年に大学職員有志による勉強会「アツい大学人の会」を立ち上げ、全国の若手・中堅職員に学びの場を提供している。

【満田清恵】平成17年国立大学法人愛知教育大学にパート職員として採用され、平成19年第一期内部登用試験に合格し専任職員となる。法人運営企画課や秘書広報課など幅広い業務を経験。学生FDの立ち上げなど教育改善業務に携わる。FDの企画・実施を通じて職員の能力開発への関心を深め、学内で自主勉強会を立ち上げるとともに、学外の勉強会や研修に積極的に参加。社会人の学びに関心が高まり名古屋大学大学院教育発達科学研究科に進学。修士(教育)。平成28年中京大学へ転職。大学院進学を機に名古屋SD研究会や大学教務実践研究会に運営協力者として参画し、組織外コミュニティから自身が活力を得る日々である。

【野田智子】平成16年国立大学法人京都大学に入職後、主に企画系業務に従事。平成30年に神戸大学に転籍後、総務部人事課、企画部企画課を経て令和6年7月から現職。これまで、大学コンソーシアム京都事務局への出向、国立大学一般職員会議(コクダイパン会議)の実行委員、名古屋大学大学院教育発達科学研究科への社会人入学等、組織外コミュニティに関わる機会を多く得てきた。

【大竹秀和】平成15年学校法人立教学院に入職後、学生支援、教務、国際化推進等の業務を担う。主に、大学間連携教育プログラム、立教型リーダーシップ教育プログラム(GLP)、英語学位コース(GLAP)の開設等を担当し、令和5年6月より現職。入職以降、学内外の大学職員有志勉強会に参加し、現在は複数の会の運営に携わる。学内勉強会活動の関連書籍として「21世紀の大学:職員の希望とリテラシー」(共編著)。修士(大学アドミニストレーション)。

### プログラム概要

社会の急速な変化に伴い、大学職員は、教学・経営の様々な分野で多様な能力や知識、経験が求められるようになった。

近年「キャリア自律」という考え方が着目されている。組織に依存し過ぎず、自らのキャリア構築と学習を主体的かつ継続的に取り組むという考え方であり、大学職員においても、所属組織を超えた「越境学習」や「サードプレイス」での学びや交流が、キャリア自律を促し、職員の能力開発にも影響を与えている。

本企画は、大学職員のキャリア自律と能力開発にとって「越境学習」の場となる、組織外のコミュニティに着目する。「SD(Staff Development)」という言葉が使われてから約四半世紀が経ち、

大学職員の組織外コミュニティは勉強会、研究会をはじめとした様々なものが生まれてきた。その変遷を捉えなおすとともに、このような活動に関わり、キャリア自律を実践している講師の話題提供を踏まえ、参加者 1 人 1 人が自身のキャリア自律と能力開発への、組織外の大学職員関連コミュニティとの関連・影響について考える機会とする。

## 準備物・事前課題

過去にどのような学内外のコミュニティや勉強会に参加したり関わったりしたことがあるか、また、これまで学内外の大学職員コミュニティに参加したことがない方は、参加してみたいコミュニティを事前課題としてまとめていただきますので、申込者には別途ご連絡させていただきます。

## 主な受講対象者

・大学事務職員等（大学等の設置形態は問いません。）

## 到達目標

1. 大学職員の学外コミュニティにどのようなものがあるかを理解することができる。
2. 学びの場で得た知識や経験がどのようにキャリアに影響を与えるか理解することができる。
3. 自身のこれまでの学内外での学びの体験・経験を言語化しアウトプットすることができる。
4. 学びの場で得たものを他者にも波及させる必要性が理解できる。
5. 学びの場で構築した人的ネットワークの活用方法を知ることができる。

## 教学マネジメント・内部質保証に寄与する学生参画の実践とは

荒木 俊博(淑徳大学 大学事務局長室 課長)

山咲 博昭(奈良女子大学 高等教育研究・支援センター 准教授)

白藤 康成(京都産業大学 学長室 IR 推進室 専任専門員)

### 講師略歴

【荒木 俊博】民間企業を経て2006年に淑徳大学に入職。長年企画部門で実務を行い、教学マネジメントや内部質保証業務に関わる。研究の専門は内部質保証や教学マネジメント、現在は科研費採択テーマである学生参画の研究をしている。

【山咲 博昭】2010年に学校法人関西大学に入職、2019年4月に広島市立大学企画室特任助教、学長付講師、教育基盤センター講師を経て、2025年8月より現職。現職では、主に内部質保証、大学評価、教学企画やFD等を担当している。研究テーマは内部質保証、教学マネジメント等である。

【白藤 康成】心理職公務員、他大学事務職員を経て2020年度より現職。IR や教学マネジメントを担当。SD や組織マネジメントの研究も行っている。

### プログラム概要

学修者本位の教育、教学マネジメント及び内部質保証文脈において、学生の参画活動が注目されています。特に一部の認証評価機関の第4期認証評価では学生参画というキーワードが注目されています。この学生参画活動について既に大学では大学の諸活動へ学生が関わるものとして学生FD、ピアサポート及びSA・TA等幅広く行われていますが、内部質保証や教学マネジメントへの参画については実践事例の紹介は少なく、大学で試行錯誤しているのが実状ではないでしょうか。

このプログラムでは、学生参画活動の背景や理論を整理し、各大学の実態や課題について検討します。またみんなで教学マネジメントや内部質保証に資する学生参画活動とはどういうものがあるかを一緒に考えてみましょう。

### 準備物・事前課題

所属大学で学生参画活動と考えられるものをリストアップしたもの

### 主な受講対象者

- ・学生参画活動について関心のある教職員
- ・教学マネジメントや内部質保証に関わる教職員

### 到達目標

1. 学生参画活動の背景や意義について説明できる。
2. 学生参画活動の課題を抽出・共有できる。
3. 所属大学での学生参画活動のアクションを提案できる。



## 分野横断・分野融合の学びの価値とカリキュラム設計を考えよう！

林 透(金沢大学 教学マネジメントセンター 教授)  
定松 淳(東京大学 教養教育高度化機構 特任准教授)  
斉藤 準(帯広畜産大学 農学情報基盤センター 准教授)  
前田 瞬(長崎県立大学 経営学部 准教授)  
山田 寛邦(早稲田大学 大学総合研究センター 講師)

### 講師略歴

【林 透】専門は質保証・カリキュラム研究。前任の山口大学を経て、2021年より金沢大学に着任し、教学マネジメントの強化や文部科学省「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」を通じた文理融合・STEAM 教育モデルの構築・発信に尽力。2025年3月一般社団法人学びのイノベーション・プラットフォーム(PLIJ)主催の第1回「PLIJ STEAM・探究グランプリ」受賞に貢献。

【定松 淳】専門は社会学・科学技術社会論。2017-8年度に京都光華女子大学短期大学部にて文部科学省「大学教育再生加速プログラム(AP)」を担当、「チーム AP 合宿」の実施などに携わる。2019年度より現職。東京大学の全学大学院生向け副専攻「科学技術インタープリター養成プログラム」の運営を担当している。

【斉藤 準】専門は理論物理学、学習分析。2009年より北海道大学高等教育推進機構特定専門職員として学習支援、FD および IR 支援を担当した後、2015年より帯広畜産大学人間科学研究部門講師、2022年より現職。専門研究に加え、自然科学実験やデータサイエンス科目のカリキュラム開発、組織的デザイン・PBL 教育の海外動向調査、DX 教材開発等に携わる。

【前田 瞬】専門は経営情報学。2015年度より徳山大学に着任し、文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」「私立大学研究ブランディング事業」の運用に携わる。2019年度より活水女子大学、2023年度より長崎県立大学に着任し、それぞれで数理・データサイエンス・AI 教育プログラムの運用に携わる。

【山田 寛邦】専門は学校経営・学習環境デザイン・高等教育。2022年より早稲田大学大学総合研究センターに着任し、教学 IR や教学マネジメント支援等、質保証の業務に従事。また「知識集約型社会を支える人材育成事業(DP)」にて、ソーシャル・イノベーター育成のカリキュラム改革に携わった。2024年度より「総合知入門」(早稲田大学社会科学部)を開講・担当している。

### プログラム概要

大学教育において分野横断・分野融合の学びが求められる要因として、「①高等学校における教科横断型教育や探究学習の広がり」「②多様な知を集めて新しい価値やイノベーションを創出できる「総合知」を備えた人材育成」が挙げられます。その一方、2023年公表の中央教育審議会大学分科会『学修者本位の大学教育の実現に向けた今後の振興方策について(審議まとめ)』では、分野横断・分野融合に関連したカリキュラム設計に関し、「具体的な方法論については、大学関係者においても必ずしも具体的な取組のイメージは共有されているものではない」と明言しています。

本企画セッションは、分野横断・分野融合に関連したカリキュラム設計に役立つ STEAM、データサイエンス、総合知、PBL 等の事例や要点の紹介から始まります。そして、参加者同士の学び合いを通して、分野横断・分野融合の学びの価値を理解し、具体的なカリキュラム設計に踏み出す実践的態度を養うことを目的とします。

## 準備物・事前課題

特になし

## 主な受講対象者

・分野横断・分野融合に関する授業開発・カリキュラム開発に関わる教職員  
・STEAM、データサイエンス、総合知、PBL 等に関する授業・カリキュラムについて興味、関心がある教職員

## 到達目標

1. 分野横断・分野融合の学びの意義や価値について説明することができる。
2. STEAM、データサイエンス、総合知、PBL といったキーワードの意義や価値について説明することができる。
3. 分野横断・分野融合に関する授業開発の要点や課題を整理し、具体的な企画を行うことができる。
4. カリキュラムを通じた分野横断・分野融合の学びを促進するための要点や課題を整理し、具体的な企画を行うことができる。
5. 新しい授業科目やカリキュラムを開発するために、学内の教職員や学生を巻き込む雰囲気づくりに貢献できる。

# 失敗から学ぶ教育への新たな視点

竹内 一（徳島文理大学 香川薬学部 准教授）

## 講師略歴

専門は生化学・免疫学・食品衛生学。2016年より、徳島文理大学香川薬学部にて入学前教育および初年次教育の実施責任者を務める。コロナ禍においては、オンライン講義実施のためのインフラ整備や教材コンテンツの作成指導に携わる。令和4年度の薬学教育モデル・コアカリキュラム改訂に伴い、カリキュラムおよびシラバス作成支援を担当。現在は、薬学生の留年・退学に関わる学習方略の特性について研究を進めている。

## プログラム概要

論文、学会、セミナー、研修などでは、教育分野におけるさまざまな優れた取り組み事例が報告されています。しかし、それらを自大学に実践しようとする、当初の想定通りにいかず思わぬ結果になってしまうことがあります。あるいは、導入検討段階で思わぬ課題に直面し、やむを得ず断念するケースも少なくありません。本プログラムでは、こうした教育分野における「失敗事例」を互いに共有し、その原因や改善策を共に考えていきます。その過程を通じて、現場でのより良いアプローチに見出すための新たな視点を得ることを目的としています。今回取り上げるのは、講義手法に限らず、評価方法、シラバス作成、学生支援など、学生への教育全般に関する取り組みです。グループディスカッションの時間を多く設けていますので、ご自身の経験を積極的に共有して新たな気づきや活力を得るための機会としましょう。

## 準備物・事前課題

これまでに試してみた講義や学生支援のための方法、あるいは導入しようとしたが種々の理由により断念した教育・支援手法について思い出してください。

## 主な受講対象者

- ・講義や学生支援を改善する必要性を感じている教員
- ・教育や学生支援方法の改善に取り組んだものの、期待した効果が得られず悩んでいる教員
- ・新たな教育手法の導入を試みたが、保留または断念した経験をもつ教員

## 到達目標

1. 教育現場で起こる失敗事例の傾向を把握できる。
2. 失敗事例の原因となり得る事象の傾向を把握できる。
3. 失敗事例を基に改善や新規手法開発の手がかりを見つけることができる。

## フューチャー・デザインで大学の未来を考える

佐藤 浩輔(大阪体育大学 庶務部学長室担当 チーフ)

塩川 雅美(龍谷大学 グローバル教育推進アドバイザー)

小林 諒太郎(大阪経済大学 総務部人事課)

森下 覚(東京都市大学 総合企画局 企画・広報部 企画・広報課 課長補佐)

### 講師略歴

【佐藤浩輔】平成20年度より大学職員として勤務し、学校法人大阪青山学園の図書館・総務部庶務課を経て、平成31年度より大阪体育大学へ転職。大阪体育大学では、庶務部研究支援担当を経験して現職。平成30年度にSDC養成講座を修了(令和5年度 愛媛大学教職員能力開発拠点SDコーディネーター(SDC)認定)。

【塩川 雅美】SDコーディネーター(SDC)として SPOD で等の講師を務め、大学コンソーシアム大阪のSD研修事業立ち上げにコーディネーターとして貢献。長年、国際交流分野や能力開発のための多様な研修会を企画・運営・実施。コロナ禍で対面研修が困難だった令和3年春、「大学のためのFuture Design 研究会」を設立し、オンライン講演会やワークショップを開催。

【小林 諒太郎】所属大学の人事課で業務として職員研修の企画運営を行っており、平成30年度にSDC養成講座を受講している。また、インストラクショナルデザインについて学ぶため、令和3年度に熊本大学大学院教授システム学専攻にて科目等履修。令和4年度から同専攻博士前期課程在学中。

【森下 覚】所属大学の企画・広報課で内部質保証の学内説明会を大学基準協会と連携し実施。また、世田谷 PF 主催「IR 研修会」講師として自大学の取り組みを共有。大学行政管理学会の研究・研修委員会委員として研修会の企画・運営を担当。直近では、新入会員向けの「JUAM で泳ごう」の企画運営チームリーダーを務めた。

### プログラム概要

あらゆる側面、分野、社会において「予測困難」と言われている現在から「これからの大学」を考えることは難しい。近年、予測不可能な社会課題解決のアプローチとして注目されている手法が「フューチャー・デザイン」です。中央省庁においても、フューチャー・デザインの社会的認知拡大を図るとともに活用に取り組んでいます。

具体的には、まず、パストデザイン法により、現在から過去の選択を振り返り、実際に実現していることとは違う仮想的な現在の大学像を描きます。次にバックキャスト法により、現在から未来を見つめて、将来予想される大学像実現の課題に向けて「何をすべきなのか」を考えます。そして、フューチャー・デザインにより「仮想未来人」として未来から現在の大学の課題を見つめ、影響がある将来世代の立場に立って議論します。

これらの手法を用いることで、通常の現代世代とは異なる発想で「これからの大学」はどうあるべきかを考える体験をすることで各大学が直面している課題に対して未来をデザインするアプローチを学ぶ機会にします。

### 準備物・事前課題

なし



## 主な受講対象者

・教職員

## 到達目標

1. フューチャー・デザインについて説明できる。
2. 「温故知新」：歴史に学ぶ重要性について説明できる。
3. これから起こることを感知する重要性を説明できる。

# 大学IR 入門一意思決定を支援する実践

中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 教授)

## 講師略歴

専門は高等教育論および人材育成論。1998年に名古屋大学高等教育研究センター助手、同准教授などを経て2015年より現職。学長特別補佐、教育・学生支援機構副機構長、教育企画室長、教職員能力開発拠点代表者を担当。愛媛大学の教育の質向上に向けたFD、SD、IRを始めとした諸活動の企画、実施、評価に加え、教職員能力開発拠点の活動として他機関における研修や組織開発支援を行う。大学教育、大学教員、大学の管理運営、看護教育などのテーマの書籍多数。

## プログラム概要

IRは、大学の意思決定を支援するための活動であり、多くの大学で実施されています。大学教育の質保証、管理運営の高度化、外部への説明責任などを担うものとしてIRに期待が寄せられています。一方で、IRを担当する組織は設置したものの、学内の意思決定などに十分に役立っていないという大学も少なくないようです。また、IRは、大学の運営にかかわる重要な情報を扱うため、外部に活動内容を公開しにくいという側面があります。そのため、各大学がIRとしてどのような活動をしているのかを大学を越えて十分に共有されにくいという課題があります。

このプログラムでは、大学においてIRをどのように実践することができるかについての論点やさまざまな実践の選択肢を紹介することで、参加者が所属大学に適したIRの方法や改善の指針を考えるきっかけを提供します。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

・大学のIRに従事する教職員、大学のIRの提供する情報を活用する教職員

## 到達目標

1. 大学のIRとその意義を説明することができる。
2. 大学の意思決定に活用されるIRの実践の方法を説明することができる。
3. IRの実践の質を高める基本的な問いを提示することができる。
4. 所属組織のIRの課題を解決する方法を提案することができる。

# 設置基準／設置手続入門－組織改革と活性化

宮内 卓也（高知大学 法人企画課課長補佐）

## 講師略歴

平成15年に高知大学に就職。総務系からキャリアを始め、平成17年には、文部科学省研究振興局に派遣された。高知大学に戻って以降は、知的財産・技術移転や研究支援等の業務を担当してきた。平成24・25年には SPOD 次世代リーダー養成ゼミナールを第3期生として受講。平成24年から法人企画課にて、大学改革・教育組織改革等を担当。これまでの間で、学部設置5件・大学院専攻設置7件の申請等を担当してきた。

## プログラム概要

大学の最も重要な機能である「人材育成・輩出」の中心となるのは、学部・学科や研究科・専攻といった教育組織であり、この教育組織を構成する要素は、学校教育法の下で、「大学設置基準」などの省令・告示により規定されている。

このプログラムでは、「設置書類」の様式や「設置手続の流れ」を概観しながら、「大学設置基準」に定められた大学（学部・学科）の構成要素を理解するとともに、学部等の新組織設置に向けて必要となる知識を身につける。併せて、令和4年に「大学設置基準」の主要な事項が改正された背景や新基準の概要にも触れることとする。

また、近年の大学改革に関する競争的資金においては、学部改組・新設など新組織設置に焦点を当てたものも増加してきている。このことにも関連付けながら、「設置基準」、「設置手続」などを理解することを目標としている。

## 準備物・事前課題

自身の所属する大学に設置されている「学部・学科名」、「入学定員数」、「配置されている教員数」、「学位（学士（○○）の特に「○○」の部分）」を事前に確認しておいてください。

## 主な受講対象者

・学部設置等について、関心のある職員。特に、経験のない方・経験年数の短い方歓迎です。  
・設置手続については、国立大学と公私立大学で「設置手続の流れ」が異なりますが、両方に共通する「申請書類」などを基に説明するので、大学の設置形態は気にせずご参加ください。

## 到達目標

1. 学部等の設置手続きの概略を説明できる。
2. 設置手続に用いる「基本計画書」に記載すべき事項を説明できる。
3. 学部等の教育組織に関する大学設置基準の規定について、説明できる。

# AI×教育：未来の授業デザインを創出するワークショップ

金西 計英（徳島大学 高等教育研究センター 教授）

田巻 公貴（徳島大学 高等教育研究センター 助教）

## 講師略歴

【金西 計英】徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000年、博士（工学）を徳島大学より取得。関西学院大学、金沢工業大学、四国大学を経て、1999年より徳島大学へ。2009年より徳島大学大学開放実践センター教授（現在は高等教育研究センター教授）。教育工学を専門とし、高等教育のe-Learningについての研究に取り組む。また、高等教育におけるアクティブラーニングの実践の研究にも取り組む。

【田巻 公貴】東京理科大学理学部卒業。東京理科大学大学院理学研究科科学教育専攻在学中。修士課程在学時に高等学校非常勤講師の経験を経て、2024年より徳島大学高等教育研究センター助教。教育工学、インストラクショナルデザインを専門とし、授業をより効果的、効率的、魅力的にするための研究に取り組む。また、生成 AI を活用した実践研究にも取り組む。

## プログラム概要

本ワークショップでは、生成 AI を活用して授業シラバスを設計・改善する手法を実践的に学びます。参加者はまず授業設計の基本を踏まえ、自身の専門や関心に応じたシラバスの構想を立てます。その後、生成 AI を用いて具体的な案を作成・修正し、グループ内で共有します。後半ではピアレビューとディスカッションを通して、AI が生成した内容の妥当性や創造性を検討し、より洗練された授業デザインへと発展させます。また、生成 AI を教育に活用する際の可能性と限界、倫理的な配慮や出力の信頼性などについても批判的に考察し、実践に活かせる視点の獲得を目指します。教育における AI 活用の第一歩として、多くの教育関係者の参加を期待しています。

## 準備物・事前課題

パソコン

ご自身が担当している授業のシラバス

## 主な受講対象者

・大学・短期大学・専門学校の教員（分野不問）

・カリキュラム設計や ICT 活用に関心のある教育関係者

※ICT 初心者でも参加可能です。生成 AI の使用経験がなくても問題ありません。

## 到達目標

1. 生成 AI を利用してシラバスを設計、改善することができる。
2. 他者と協働して、生成 AI が出力したシラバス案の妥当性・創造性・実用性を分析し、具体的な改善提案を行うことができる。
3. 生成 AI を教育に活用する際の可能性や限界、倫理的な留意点を説明し、生成 AI の出力を批判的に検討して適切に活用することができる。



# 初めてでもできる SD 研修の企画・運営・評価

葛西 崇文(愛媛大学 教育・学生支援機構 特任助教)

阿部 光伸(愛媛大学 教育・学生支援機構 講師)

## 講師略歴

【葛西 崇文】専門は、知覚心理学、SD。青森県、大阪府での私立大学職員としての勤務を経て、令和7年1月から現職。SD 研修の企画・運営や体系化、SD 研修会講師としての登壇など、大学職員の能力開発に携わっている。

【阿部 光伸】専門は、産業組織心理学／産業教育論。専門学校での教員、私立大学の職員を経て平成25年10月から現職。現在は、大学生のキャリア形成支援、準正課教育(特に、ボランティア活動支援)と、他機関を含め大学職員の能力開発を担っている。

## プログラム概要

SD の実施が義務化され、各大学において様々な SD 研修会が実施されています。一方で、毎年 SD 研修会を実施するにあたり、明確な目的に基づいて、受講者の学習意欲を高め、効果の高い研修を行うことは簡単なことではありません。特に、初めて SD 研修を担当することになった場合には、研修をどのように企画・運営・評価したらよいかわからない、という場合もあるのではないのでしょうか。

そこでこのプログラムでは、研修の運営・評価の起点ともなる企画の段階に焦点をあてます。特に、受講者の意欲や効果を高め、企画において重要となる研修の目的設定と到達目標の設定プロセスについて、座学とワークを通して学びます。ワークの中では、参加者間での業務上の課題共有なども行います。受講後には、自大学で利用できる研修のテーマ、目的、到達目標の案を持ち帰ってもらうことを目指します。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

- ・SDを担当している教職員
- ・SDを担当する予定の教職員
- ・SDを担当することに関心のある教職員

## 到達目標

1. SD の目的を説明することができる。
2. SD の目的を達成するための研修目標を設定できる。
3. 目標に応じた企画・運営・評価のコツを説明できる。

## パフォーマンスが上がる職場とは

島田 くみこ(高知工科大学 学生支援部就職支援課 課長)

浜田 昌代(高知大学 広報・校友課 課長)

高木 佳代子(愛媛大学総務部広報課 課長)

坂本 規孝(広島市立大学 教育基盤センター 特任講師)

### 講師略歴

【島田 くみこ】高知工科大学(現 高知県公立大学法人高知工科大学)に入職後、入試・広報関係、学生支援関係を経て高知県への派遣勤務後、法人本部総務企画課長、同法人高知県立大学教務・学生支援課長を経て2025年4月から現職。東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コース修士課程修了。修士(教育学)。日本高等教育学会所属。SPOD-SDCとして、法人内、他機関において研修を行っている。IDE 現代の高等教育2017年6月号「大学職員の人材マネジメントに関する調査結果」を執筆。職員の能力開発、職場環境について関心が高い。

【浜田 昌代】高知大学事務職員採用。これまで、高知大学及び大学改革支援・学位授与機構で勤務。高知大学では総務課、会計課、IR・評価室、人事部門では人事管理業務、研究推進部門では研究力強化に向けた企画、支援業務を担当。2025年4月から現職。2012～2013年度SPOD次世代リーダー養成研修受講・修了。2022年2月SPOD-SDC資格認定。

【高木 佳代子】民間企業勤務を経て、1996年愛媛大学採用。医学部秘書業務、情報関係、共済組合関係、教務関係、就業環境関係業務を経て、2025年4月から現職。

SPOD-SDC、教職員能力発掘点 SDC、産業カウンセラー、国家資格キャリアコンサルタント。

【坂本 規孝】2006年4月、学校法人立命館に専任事務職員として入職。立命館大学、立命館アジア太平洋大学、法人本部において、教学、留学生入学、新キャンパス開設、新学部設置、役員秘書等を担当。愛媛大学を経て、2024年4月から現職。SDC(SDコーディネータ)、SPOD-SDC。修士(教育学)、修士(芸術学)。多国籍な職場や役員秘書などの経験に加え、職員から教員に転身して見える景色を踏まえて、職員や教職協働といった職場環境にも関心が高い。

### プログラム概要

「パフォーマンスが上がる職場で働きたい」と思いますか？多くの人が「はい」と答えるでしょう。

では、「パフォーマンスが上がる職場を自分でつくりたい」と思いますか？こちらには少し躊躇する人もいるかもしれません。

このプログラムでは、SPOD-SDC(SD コーディネーター)の認定を受けた講師陣のサポートの下、参加者一人ひとりが自分の立場でできることを考え、実践への一歩を踏み出すことを目指します。

午前は、「パフォーマンスが上がる職場」とはどのようなものか、逆に「下がる職場」では何が起こっているのかを考え、良い職場環境、風通しの良い職場の具体的なイメージを描きます。午後は、パフォーマンスが上がる職場をつくるためにそれぞれの立場で実際にできることを考えます。講義、個人ワーク、グループワークを通して、パフォーマンスが上がる職場をつくるためのアイデアや自分にもできることがあるという気づきを得ることができます。

### 準備物・事前課題

パフォーマンスが上がる職場や下がる職場について、その原因や理由を考えてください。考えた内容は、当日のワークで発表していただきます。

## 主な受講対象者

・組織の一つのまとまりである「課」などを対象として、パフォーマンスが上がる職場をつくりたい教職員

## 到達目標

1. パフォーマンスが上がる職場とは何かを説明できる。
2. パフォーマンスが上がる職場が必要となる理由を説明できる。
3. パフォーマンスが上がる職場・下がる職場について、そのようになる要因を見立てることができる。
4. パフォーマンスが上がる職場をつくるために、自分がとれるアクションを提案できる。

# 学生支援のこれまでと最新動向を知り、考える

蝶 慎一（香川大学 教育推進統合拠点 大学教育基盤センター 准教授）

## 講師略歴

専門は高等教育学、学生支援、大学教育。北海道大学教育学部卒業後、2018年に東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻博士課程修了。博士（教育学）。2012年～2016年に国立大学協会特別研究員、2015年より（独）大学評価・学位授与機構研究開発部特任研究員、2016年より（独）大学改革支援・学位授与機構研究開発部助教、2020年に広島大学高等教育研究開発センター（RIHE）助教、同大学教育学学習支援センター助教を経て、2022年4月より現職。（独）日本学生支援機構の学生支援の取組状況に関する調査協力者会議委員、国立大学協会政策研究所客員研究員、大学史研究会事務局長なども務めている。所属先である香川大学では、全学共通教育、FD、TA、教学IRを始めとした諸活動や研修等を行う。主な研究関心は、日本（戦後沖縄）、アメリカ、カナダの学生支援、教養教育、TA などに関する歴史研究・国際比較である。

## プログラム概要

学修者本位の大学教育における学生支援は、きわめて重要になっています。高等教育政策が大きく変化する中で、国内はもとより海外においても学生支援に関する多様なニュースが報じられています。また、学生支援をとりまく各種調査のデータや多様な結果が出されており、それらの現状を把握し、理解すること自体が容易ではなくなってきました。こうした急速に変化する国内、海外の大学教育における学生支援をめぐる、学生たちはどのような問題や困難、課題を抱えているのでしょうか。それに関わる教職員スタッフには、どのような職能開発が求められるのでしょうか。

このプログラムでは、日本と海外（アメリカ、韓国、カナダを予定）の大学における広く学生支援の理念、取組内容、その特徴について先駆的な取組事例をいくつかご紹介することで、参加者の皆様のご所属機関等における学生支援をめぐる職能開発の可能性を試行的に考えるきっかけとしたいと考えております。皆様のご参加をお待ちしております。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

- ・広く学生支援をめぐる取組事例に興味関心のある教職員
- ・広く学生支援をめぐる職能開発に興味関心のある教職員
- ・学生支援に関わる教職員、学生スタッフ（TA 等も含む）による活動に興味関心のある教職員
- ・国内、海外の学生支援の歴史や、最新動向に興味関心のある教職員

## 到達目標

1. 国内、海外の大学における学生支援の理念、取組内容、その特徴について理解することができる。
2. 国内、海外の大学における学生支援の取組事例を把握し、その特徴と可能性を参加者どうして議論し、これからも継続的に考えるためのアイデアを整理することができる。
3. 自大学（ご自身の所属機関等）の学生支援をめぐる職能開発の可能性を試行的に考えることができる。



# 卒業時の学修成果可視化と教育の内部質保証

竹中 喜一(近畿大学 IR・教育支援センター 准教授)

## 講師略歴

専門は高等教育論および教育工学。特に大学教職員の学習と研修転移に関心を寄せている。民間企業での SE 等の業務、関西大学での事務職員および愛媛大学特任助教、講師、准教授としての FD、SD、教学 IR 等の業務を経て、2023年より現職。並行して2023年より山梨県立大学特任准教授としてカリキュラムを通した学習成果などに関する教学マネジメントアドバイザーも務める。関西大学在職中に名古屋大学大学院、大阪大学大学院を修了。博士(人間科学)。主な著書に『シリーズ大学教育の質保証2 学習成果の評価』(編著)、『大学 SD 講座4 大学職員の実力開発』(共編著)、『大学 FD 入門』(分担執筆)などがある。

## プログラム概要

教育の内部質保証にあたり、各大学はアセスメントプラン(ポリシー)を定め、さまざまな方法で学修成果を評価しています。しかし、特にディプロマ・ポリシーに沿って卒業時の学修成果を可視化し評価するにあたって課題をもつ大学も少なくありません。卒業時の学修成果を可視化する方法にはどのようなものがあるのでしょうか。可視化し評価した結果を、教育の内部質保証にどのように活用しうのでしょうか。本プログラムではこれらの問いについて、卒業時の学修成果の可視化と教育の内部質保証に関する講義を通して考える機会を提供します。主に、講師が所属大学で実践する3つのポリシーの見直しや、「卒業論文ルーブリック」作成支援事例、それに加えて竹中喜一編(2023)『シリーズ大学教育の質保証2 学習成果の評価』の内容を取り扱います。

## 準備物・事前課題

所属組織(全学または特定の学部等)の卒業時の学修成果について、どのような方法で可視化を行っているかについて、アセスメントプラン等でご確認ください。また、当日の内容理解を進めやすくするために、竹中喜一編著(2023)『学習成果の評価』(玉川大学出版部)の1~6章を事前にご確認いただくと、当日の内容の理解が進みます。

## 主な受講対象者

・卒業時の学修成果の可視化と教育の内部質保証について、基礎的な内容や実践例を知りたい教務・学務系の職員や教務委員など学部等のカリキュラムに関わる教員の方を主な受講対象と想定しています。

## 到達目標

1. 卒業時の学修成果を可視化する目的を説明することができる。
2. 卒業時の学修成果を可視化する方法と留意点を列挙することができる。
3. 卒業時の学修成果の可視化を教育の内部質保証に活用する方法を検討することができる。

## ゲームで考える職員間のギャップ

藤巻 晃(徳島文理大学 地域連携センター 課長補佐)  
野口 里美(香川大学 理事・副学長)

### 講師略歴

【藤巻晃】1999年より徳島文理大学に勤務。総務課、入試広報部、地域連携センター、地域連携センターと総務課の兼務を経て、2025年度より現職。これまでに SPOD において、コミュニケーションやチームビルディング、キャリア形成、学生支援等の講師を担当。2016年度 SPOD-SDC 認定。2019年度教職員能力開発拠点 SDC 認定。

【野口里美】1986年香川大学採用。総務、会計、学務を一通り経験した後、2018年度から6年間の企画総務部在職を経て現職。SPOD 設立当初からネットワークコア校のFD担当事務として携わる。これまでの SPOD フォーラムでは、「ワールド・カフェ」「ツールを使ってコミュニケーション～自己理解と他者理解～」等の講師を担当。2015年度 SPOD-SDC 認定。2016年度教職員能力開発拠点 SDC 認定。その他、Coco-iku(心育)SPT コミュニケーションカウンセラー・メンタルヘルスイストラクター認定。

### プログラム概要

現代社会は、ダイバーシティの推進や働き方改革によって、個々の事情に合わせた多様な働き方が広がっています。高等教育機関においても、定年延長や再雇用制度、長時間労働の是正、男性の育児休業取得などが推進されています。その一方で、デジタル化の進展は、対面でのコミュニケーション機会の減少をもたらしています。

このような変化の中で、世代間、あるいはジェンダーなどによって、働き方や考え方にギャップが生じているのではないのでしょうか。

本研修では、様々な年代の職員が抱える世代間の認識のずれ、ジェンダーによるギャップ、価値観の相違などについて、ゲームを用いて、楽しく、そして本音で語り合う場を提供します。

互いの働き方や考え方を共有し、尊重し合うことを通して、参加者一人ひとりが多様な視点への理解を深めことにより、明日からの業務において、より円滑なコミュニケーションと協働につなげることを目指します。

### 準備物・事前課題

この研修では、大学職員として働いていて感じる職員間のギャップについて楽しく本音で語り合うことを目指しています。他者とのギャップについて話したいことなどを後日お知らせする指定フォームからご回答ください。

### 主な受講対象者

- ・世代やジェンダー等により価値観のギャップに悩む職員
- ・最近、本音でコミュニケーションがとれていない職員

### 到達目標

1. 世代間およびジェンダー等による価値観のギャップについて、具体的な事例をあげて説明できる。
2. 世代やジェンダー等による価値観のギャップについて、自身の経験や意見を共有し、他者の意

見に耳を傾けることができる。

3. 多様な年代やジェンダーに属する職員の働き方や考え方について、その背景にある理由や状況を理解し、尊重することができる。
4. 本研修で得られた多様な働き方や考え方への理解を行動に移すことを宣言できる。

## 地域の未来を拓くアントレプレナーシップ教育

石原 佑(徳島大学 高等教育研究センター 学修支援部門 特任助教)

佐野 淳也(神山まるとと高等専門学校 デザインエンジニアリング学科 准教授／  
徳島大学 人と地域共創センター 客員准教授)

廣瀬 智子(神山まるとと高等専門学校 デザインエンジニアリング学科 講師(英語))

付 媛媛(神山まるとと高等専門学校 デザインエンジニアリング学科 3年生)

濱上 隆道(富士通株式会社 CEO 室シニアマネージャー／神山まるとと高専協働  
推進担当)

### 講師略歴

【石原 佑】1991年、徳島県生まれ。専門はアントレプレナーシップ教育／デザイン学。東京造形大学造形学部デザイン学科卒業。在学時はデザインの未来を担う「金の卵」を一堂に紹介する「アクシス第7回 “金の卵” オールスターデザインショーケース」などに選出される。その後10年間ほど、フリーランスデザイナーとして東京、北米を拠点に分野問わず活動を行う。2020年にはデザインコンサルティング会社、株式会社 BLUE を設立する。2022年には特定非営利活動法人 Arts Shikoku の代表理事に就任し、中四国地方の芸術家支援に取り組む。2019年度より行なってきた徳島大学発スタートアップスタジオ U-tera での起業家支援の取り組みを本格化するため、2022年より徳島大学高等教育研究センターにて特任助教に着任。

【佐野 淳也】1971年、徳島市生まれ。一橋大学大学院社会学研究科修了(社会学修士)、法政大学大学院公共政策研究科博士後期課程満期退学、博士(ソーシャル・イノベーション／同志社大学2020)。立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科特任准教授、同志社大学政策学部准教授などを経て2023年より現職。神山まるとと高専では、社会共生と地域共創を学ぶ「ネイバーフッド概論／演習」を担当。これまで NPO 論やまちづくり、ワークショップデザインなどの科目を多くの大学で教えてきた。「創造的人口減少を可能にするまちづくり生態系」と「社会的包摂を進めるブレンディングコミュニティ型地域の居場所」が最近の研究テーマ。共著に「ソーシャル・イノベーションの理論と実践」(明石書店)、「はじめてのファシリテーション」(昭和堂)ほか。

### プログラム概要

アントレプレナーシップ教育は、日本においては「起業家を育てる教育」と捉えられがちですが、実際には起業家の持つチャレンジ精神や創造性、またリーダーシップやコミュニケーション力といった「起業家的思考行動特性」を身に付け、幅広く人生やキャリアに活かしていくための教育実践であり、いわば全ての教育現場において求められているものと言えます。

本プログラムでは、こうしたアントレプレナーシップ教育を高等教育の現場でどのように展開し、また地域の未来を拓く人材を育成していけるのか、徳島大学スタートアップスタジオ U-tera の実践、そして2023年に新たに開校した神山まるとと高専の地域及び企業との連携実践事例をご紹介した上で、参加者の皆様と探究していきます。さらにフィンランドで行われているホリスティック・アントレプレナーシップ教育の実践とその理念についても紹介し、四国地区ははじめ全国の高等教育現場にどのように応用していけるのかを考えます。

プログラム前半においてこうしたアントレプレナーシップ教育の基本理念と講師による実践事例を共有し、後半では「どのようにアントレプレナーシップ教育を実践し、それによって地域の未来はどう拓かれるのか？」の問いのもと、参加者の皆様全体でグループワークを行い、対話によって深めま



す。

### **準備物・事前課題**

すでに何らかのアントレプレナーシップ教育を実践されている場合は、グループワーク時において他の参加者に見せることのできる資料（パンフレット／報告書／ウェブサイトなど）を可能な範囲でお持ちいただけると幸いです。

### **主な受講対象者**

・アントレプレナーシップ教育や地域連携教育に興味関心のある方、またすでに実践されている方であればどなたでも歓迎です！ぜひ一緒に対話いたしましょう！

### **到達目標**

1. アントレプレナーシップ教育の基本理念や概要について説明することができる。
2. アントレプレナーシップ教育実践の具体事例の概要について説明することができる。
3. 「どのようにアントレプレナーシップ教育を実践し、それによって地域の未来はどう拓かれるのか？」という問いに対し、自分なりの仮説や解答を提示することができる。
4. 自分の所属先の教育機関において、「地域の未来を拓くアントレプレナーシップ教育」をどのように実践していくのか、そのイメージや方向性を見出すことができる。

# 障害学生支援の観点から考えるユニバーサルデザイン

高橋 由子 (高知大学 学び創造センター 特任助教)

## 講師略歴

発達障害児・者の支援法に関する臨床・研究を行ってきており、2021年より現職。高知大学の発達障害等のある大学生の修学支援に取り組みながら、2021年度ダイバーシティ推進共同研究支援制度の助成を受け、「授業のUD化と合理的配慮 Tips みんなが学びやすい授業づくり」を発行。学内外においてユニバーサルデザインな授業づくりに関するFDを実施している。

## プログラム概要

改正障害者差別解消法は2024年4月より施行されており、私立大学等においても、法的義務として合理的配慮の提供が求められるようになりました。法では、合理的配慮の提供とあわせて、合理的配慮の基礎となる基礎的環境整備（事前的改善措置）を進めていく必要があることが示されています。授業における基礎的環境整備の一つに授業等のユニバーサルデザインがあります。

このプログラムでは、「障害学生支援の観点から考えるユニバーサルデザイン」に焦点をあてて、学生対象のオリエンテーション、ガイダンス等の行事や授業の工夫について紹介をしていきます。

## 準備物・事前課題

プログラム中に、二次元コードを示し、スマートフォン等で反応を求める場合があります。ネット接続可能な端末があればお持ちください。なくても参加可能です。

## 主な受講対象者

・授業担当者、学務・学生支援担当教職員

## 到達目標

1. 多様な学生を想定したUDな視点での資料・授業づくりの必要性を理解することができる。
2. 多様な学生を想定したUDな資料・授業づくりの工夫を知ることができる。
3. 今後の活用したいとおもう工夫を考えることができる。

# 現代の社会課題と大学の役割

斉藤 卓也(情報・システム研究機構 副機構長)

## 講師略歴

東京大学工学部電気工学科卒業、科学技術庁(現文部科学省)入庁。カリフォルニア大学サンディエゴ校留学、ライフサイエンス課長補佐、在オーストラリア日本大使館一等書記官、文部科学省非常災害対策センター(EOC、福島原発事故対応)、会計課予算企画調整官、山口俊一内閣府特命担当大臣(科学技術、IT、クールジャパン)秘書官、基礎研究推進室長、徳島大学副学長、文部科学省産業連携・地域支援課長、人材政策課長、理化学研究所経営企画部長などを経て現職。

## プログラム概要

コロナのパンデミックは終息しましたが、国際状況の大きな変化、地球温暖化、少子化・高齢化など、様々な社会課題がある中、AIなど最先端技術は急速に進展しています。

変化の激しい現代において、大学の置かれた状況、日本の科学技術イノベーションの状況、AIなど最先端の科学技術の動き、関連する政策などを俯瞰するとともに、今後の方向性、大学に期待される役割、私たちが意識、行動すべきことなどを考えていきたいと思います。

もちろん明確な答えは存在しませんが、関連する様々な組織、ポストで仕事をしてきた経験から考えてきた事をお話したいと思います。皆様が今後の仕事を進めるにあたり、少しでも参考になれば幸いです。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

・関心のある教職員

(四国の国立大学への出向経験のほか、他省庁、日本大使館、国立研究所など様々なポストを経験してきた文部科学省職員から見た大学の立ち位置や可能性についての話に関心がある方)

## 到達目標

1. 大学における日々の業務の意味や、今後の可能性を改めて意識することができる。

# 明日から使える大学業務システム内製開発ハンズオン

末廣 紀史(香川大学 情報部 情報システム課 課長)

木村 悠佑(香川大学 情報部 情報システム課 主任)

川瀬 舞(香川大学 情報部 情報企画課 課員)

## 講師略歴

【末廣 紀史】民間企業で8年間、関西圏の大学 ICT インフラの構築業務を経験し、平成25年に香川大学に入職。令和4年度に香川大学大学院創発科学研究科修士(工学)を修了。本プログラムでは香川大学の DX 推進の考え方や実施内容について講演をおこない、その他開発事例の共有をおこないます。

【木村 悠佑】平成28年香川大学事務職員に採用。これまで法学部学務係、給与福利課を経て令和7年度から現職。給与福利課在籍時より情報システム課を併任し、MicrosoftPowerPlatformを使用した内製開発を実践。本プログラムではハンズオンの進行をつとめます。

【川瀬 舞】令和6年度香川大学情報部情報企画課採用。令和4年から DX 推進研究センター技能補佐員としてシステム内製開発の業務に従事。学内外向けのハンズオン(MicrosoftPowerPlatformを使用した内製開発)の講師を担当。本プログラムではハンズオン参加者のサポートをつとめます。

## プログラム概要

香川大学はプロ開発者組織である「DX ラボ」を組織し、大学業務システムの内製開発を令和3年度からおこなってきました。そのノウハウを活かし、非情報系職員が自らも開発をおこなうスキルとして獲得できる「内製開発ハンズオン」を実施してきました(令和7年4月時点で44回開催、1858名参加)。DX 推進の担当者からのインプットトークと、開発の一部を体験するハンズオンとなっています。

日本の教育機関が無償契約できる MicrosoftPowerPlatform AI ライセンスの範疇で、大学でよくある業務を題材とした Forms での申請、PowerAutomate での自動化、SharePoint へのデータ保存の入門的内容を体験していただきます。

参加者がそれぞれの大学に戻っても実践できる講習内容になっております。DX ってなんだろう?と感じてらっしゃる方も、自分の業務を改善するキッカケにさせていただけると考えています。

## 準備物・事前課題

なし(会場の PC と、香川大学が発行した ID を用いる想定)

## 主な受講対象者

- ・普段の業務で Office 系ソフトを使って業務がおこなえていること。
- ・MicrosoftPowerPlatform の利用経験は問いません。
- ・また、本ハンズオンの受講対象は以下のとおり
  - ・自大学内において、これから市民開発者としての活動が求められている人
  - ・自大学内において、DX 活動をしたいと思いつつ、第一歩が踏み出せていない人

## 到達目標

1. 香川大学の DX 推進におけるキーワードと、それを具体化した戦略や取り組みをぼんやりと知る



ことができる。

2. 業務に使えるシンプルなシステムが簡単に開発できると思えるようになる。
3. 業務に関するデータを簡単に可視化できることに気づくことができる。

# Power Query for Excel を用いた効率的なデータ処理

高畑 貴志(高知大学 学び創造センター 准教授)

## 講師略歴

専門は情報科学。2000年に大阪大学基礎工学研究科助手、2003年に高知学園短期大学講師、2015年に湊川短期大学准教授、2018年より高知大学大学教育創造センター特任講師、2022年10月より現職。eラーニング(知プラe事業)や教学IRなどを担当。

所属学会:日本教育工学会、日本オペレーションズ・リサーチ学会

## プログラム概要

Power Query は、多様なソースからの形式の異なるデータを統合して扱う前処理のツールであり、ワークシート上の作業をデータ処理の手順として記録できます。このプログラムでは、講師がダミーのデータを用いた Power Query による処理手順を順に説明していきます。受講生は、手元で同じ処理を再現することで、Power Query の基本的な概念と操作方法を学びます。

Power Query により、以下のようなデータ処理を効率的に行えます。

- ・複数のデータソースからのテーブル(表)を Excel 上で容易に結合できる。
- ・データ処理の試行錯誤が、操作ステップの削除、追加、適用順序の入れ替えとして行える。(途中の状態の表を作成しておく必要がない。)
- ・一連の操作を、更新されたデータや異なるデータセットに対して容易に適用できる。
- ・ワイド形式(学生毎に1行のアンケートデータ:Google Form の出力等)とロング形式(回答ごとに、回答者、質問番号、回答内容を1行で格納:BI ツールに適する)を相互に変換できる。

## 準備物・事前課題

受講には、Windows のデスクトップ版の Excel2016、Excel2019、Excel2021、Excel2024、Microsoft365版 Excel のいずれかをご用意ください。(Mac や Web アプリ版では Power Query のほとんどの機能を利用できません。)

プログラム受講前に事前に公開される説明資料とダミーデータを用いて、オンデマンドで学習することができます。プログラム当日は、受講者への個別の対応が困難ですが、事前公開の資料とダミーデータを用いて、フォーラム終了後1か月の間に動作を確認することが可能です。その間は受講者からの質問もオンデマンドで受け付けます。

## 主な受講対象者

・日常の業務でデータ処理を多く行う教職員、特に、以下のような経験をされている方に適した内容です。

- ・同じようなデータ処理を何度も繰り返すことがある
- ・データの集計のために試行錯誤を繰り返す
- ・Power BI 等の、Microsoft PowerPlatform のサービスを使用することがある(Power Query は Power Platform にも組み込まれているため)

## 到達目標

1. プログラムで提供される資料を参照して、Power Query で a～d の操作を再現することができる。
  - a. 複数の Excel 表のデータを結合して、特定の条件に適合する対象のみを抽出して集計した結果を Excel の表として取得するという一連の集計手順を実行できる。
  - b. 抽出条件を変更して同じ集計を適用できる。
  - c. 元データを入れ替えて同じ集計を適用できる。
  - d. ワイド形式とロング形式のデータを相互に変換できる。
2. Power Query を自分の大学の業務で活用できる場面を挙げることができる。

# 保育・幼児教育分野のためのFDを企画しよう

塩川 奈々美(徳島大学 高等教育研究センター 教育の質保証支援室 助教)  
寺川 夫央(今治明德短期大学 幼児教育学科 教授)

## 講師略歴

【塩川奈々美】徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻地域創生分野博士後期課程修了。博士(学術)。専門は日本語学および方言学。2018年に徳島大学総合教育研究センター(現:高等教育研究センター)教育改革推進部門特任助教を経て、2020年4月より現職。同センター教育改革推進部門(兼任)。FD担当として徳島大学における全学FDプログラムの企画・運営・調査研究に携わり、支援業務に取り組むほか、学生アンケートや教員アンケートなどの教学アンケートにおける自由記述についてテキストマイニングを活用した質的分析に取り組む。

【寺川夫央】愛媛大学教育学研究科学学校教育専攻修了。修士(教育学)。専門は心理学(発達・臨床)、教育学。動物のかかわりと子どもの発達、学生の学びの促進に向けた大学教育のあり方、青年期の身体像などをテーマに研究を展開。現職では「保育の心理学」「保育臨床相談」「幼児と人間関係」などの科目を担当しつつ、FD委員として学科内のFD業務に携わる。

## プログラム概要

保育・幼児教育分野における大学教員に対する分野特化型FDの開発は、個々の教員の専門性を深化させるだけでなく、幼児教育における5領域の能力育成に向けた教科横断的な視点を養い、多様な専門性を持つ教員間の連携を強化することで、幼児教育全体の質向上を図る重要な取り組みであると言えます。

このプログラムではFD企画の基本や保育・幼児教育分野の大学教育の現状や課題について学びつつ、参加者がワークショップを通じて保育・幼児教育分野の教職員を対象としたFDを企画立案することを目指します。

参加者の皆様には事前課題として、ご所属における当該分野のFDの状況やご自身がどのような専門で授業を担当しているのか、抱えている課題意識などに関する情報を整理してきていただきます。当日は個人ワークとグループワークを行いますので、保育・幼児教育分野FD開発に向けた積極的な参加を期待しています。

## 準備物・事前課題

ご所属におけるFDの実施状況や参加者の専門、担当科目、問題意識等に関する情報(必要な情報をリスト化したものを事前に共有します)

## 主な受講対象者

・保育・幼児教育分野の授業担当者および関連する職員。保育・幼児教育分野の授業科目に基づくワークを予定しているため、授業担当者であることが望ましいですが、当該分野のカリキュラム改善などに関心のある職員であればこの限りではありません。

## 到達目標

1. FDが求められる背景や企画する際の留意点を説明することができる。
2. 保育・幼児教育分野担当者が抱えるFDニーズを挙げるができる。
3. 保育・幼児教育分野FDの企画立案ができる。



# 学務系職員のための学生理解・支援

野口 悟（高知大学医学部・病院事務部総務企画課地域医療支援室 室長）

## 講師略歴

平成15年4月高知大学事務職員に採用。これまで、高知大学及び国立青少年教育振興機構国立室戸青少年自然の家で勤務。高知大学では情報推進・研究推進関係部署に加え医学部学生課で勤務し、医学部学生課勤務が通算して12年を超える。令和7年4月から現職。平成23～24年度に現在の次世代リーダー養成ゼミナールを受講・修了。平成24年度科学研究費補助金（奨励研究）採択。令和3年3月 SPOD-SDC 資格認定。

## プログラム概要

多様性社会といわれている中で育ってきている学生は様々な特性を持っています。年代が離れるほど世代間ギャップを感じる方が多いかと思えますし、近年の若者について、コスパ・タイパ重視、デジタルネイティブ（SNS）なZ世代と称することもあります。このような中、高等教育においてもパワハラ・アカハラ、発達障害やSOGIなど合理的配慮、コロナ禍以降はオンライン授業についていけない学生サポートなども含め、教育環境の整備が求められています。本プログラムでは、多様な学生を少しでも理解していただいたうえで、学生に身近な職員として学生の支援のヒントを得ていただくことを目的としています。学生と直接接点のある学務系の職員であれば遭遇しそうな「事例あるある」を“共有できる範囲で”共有するディスカッションやグループワークに時間をできるだけ多く取りたいと考えています。

## 準備物・事前課題

<課題1>大学職員として仕事をする中で遭遇した学生に関する問題、困りごと、困難な事例（解決していれば解決方法も含め）があれば用意しておいてください（個人が特定されないように注意）。事例をお持ちでなければ、周辺の職員にインタビューして可能な範囲で情報収集してみてください。  
<課題2>独自のケースを事前配付しますので各自読み込んで、自身の経験も踏まえあらかじめ考えてから研修に参加してください。

## 主な受講対象者

・教務担当、学生支援担当職員

## 到達目標

1. 最近の若者の一般的な特徴を理解できる。
2. 一人で悩まず課題解決の方法を仲間で話し合うことができる。
3. 他機関の職員と情報交換し、仲間を作ることができる。

# 留学生支援のための制度理解

岩田 剛(愛媛大学 国際連携支援部国際連携課国際支援チーム チームリーダー)

## 講師略歴

平成24年鳥羽商船高等専門学校事務職員に採用。その後、愛媛大学に転籍し、国際連携支援部、総務部を経験し、令和4年から現職。平成30・31年に SPOD 次世代リーダー養成ゼミナールを受講し修了。愛媛大学認定研修講師。関連著書に『大学教育の国際化』(分担執筆)。

## プログラム概要

令和6年の在日外国人留学生数は33万6千人を超え、過去最多を更新しました。今後、少子化社会のなか留学生の受入れがさらに拡大することが予想されます。一方で、近年首都圏で大量の留学生失踪事案が発生したことを契機として、各大学等は国からより厳格な留学生の在籍管理が求められています。

各大学等が留学生を受け入れるにあたり、在留資格に関連する法律などのルールに違反してしまうと、留学生が留学を継続できなくなったり、受入機関が罰則を課せられる恐れがあります。留学生の生活や学習においても留意すべきことがあるため、制度に対する理解は、教務関連の部署をはじめ、教職員全体に求められるともいえます。

このプログラムでは、留学生支援にあたって必要な制度について、在留資格、在籍管理を中心に理解し、その理解をもとに、他機関の教職員ともグループワークで意見交換を行いながら、参加者の皆様が自大学等で組織的に留学生を支援するための方策を考えていきます。

## 準備物・事前課題

所属組織の留学生の支援体制(在籍管理、卒業・退学・除籍後の帰国指導)について可能な範囲で調べておく

## 主な受講対象者

・教職員(国際系部署以外の職員の参加を歓迎します)

## 到達目標

1. 留学生支援に関連する制度、特に在留資格、在籍管理について説明することができる。
2. 所属組織の留学生支援の特徴と課題を抽出することができる。
3. 所属組織の留学生支援の特徴と課題に対する提案を行うことができる。

# 学び続ける事務組織と実践する職員の育て方

宮林 常崇(東京都立大学 教務課長・開設準備担当課長兼務)

## 講師略歴

公立大学法人首都大学東京(現 東京都公立大学法人)に入職後、教務畑を中心に歩み、文部科学省出向、URA室長、企画広報課長、東京都立産業技術大学院大学管理課長、理系管理課長等を経て2025年4月から現職。主に職員の人材育成、高等教育法令・政策、アカハラ予防に関する研修を担当している。愛媛大学教育企画室(教職員能力開発拠点)プロジェクトフェロー、名古屋大学高等教育研究センター大学教務実践研究会事務局長、公立大学協会事務局参与。文科省「大学におけるハラスメント防止等の推進に向けた普及啓発に関する調査研究」有識者会議委員。著書に『大学の教務 Q&A 第2版』(共編著)、『大学業務の実践方法』(共編著)、『大学教育の国際化』(共編著)、『大学教育と学生支援』(分担執筆)などがある。

## プログラム概要

学ばない・学べない事務組織には、どのような背景や課題があるのでしょうか。職場の中には、マイナスをゼロにする仕事に日々忙殺され根本的な課題解決に着手できない、欠員と連携不足により最低限の業務遂行すら危うい状況などを耳にします。学生が安心して学びに向き合う大学の基盤づくりのために、まずはこのような状況を緩和し、次に、強く・しなやかな事務組織を作り上げていくことも必要です。

この研修は、職場を取り巻く様々な課題を緩和することと、学び実践する職員をどのように育成するか、という2つの難題を職場単位の取り組み中心に考えます。例えば、業務分担や目標管理、ミーティングや学びの場づくりの方法で職場は大きく変わります。この研修で扱うマネジメントの手法は基本が中心ですが、それを大学組織の文脈で捉えなおしてみます。また、リーダーが抱えがちな孤独や不安に向き合いながら組織改善を続けるための工夫や心構えも扱います。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

- ・事務組織のマネジメントに関心のある教職員
- ・事務組織のリーダー(課長や係長など)
- ・リーダーを目指すべきか悩んでいる職員
- ・単科大学におけるフリーアドレス&在宅勤務環境導入の実践例に興味のある方

## 到達目標

1. 個人ではなくチームで組織改善に取り組むことができる。
2. 職員の学びの場づくりに貢献できる。
3. 実践できる職員の育成に貢献できる。

## 「SPOD オンライン FD コンテンツプラットフォームサイト」を活用する

飯尾 健(徳島大学 高等教育研究センター 助教)

### 講師略歴

令和2年3月京都大学大学院教育学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士(教育学)。  
京都大学高等教育研究開発推進センター研究員を経て、令和2年9月より現職。現在 SPOD FD  
調査研究プロジェクト・オンライン FD チームリーダー。

### プログラム概要

SPOD-FD 調査研究プロジェクトでは、各コア校が作成したオンライン FD コンテンツの情報を検索・アクセスできるサイトを開発しました。これは様々な動画等の FD コンテンツを組み合わせることで各大学のニーズに合わせた FD プログラムを実施したり、教員個人の課題意識に合わせた授業改善のための学習の機会を提供できることを意図したものです。

このプログラムでは、このサイトやその活用法を紹介するとともに実際に FD コンテンツの検索・アクセスを行う機会を設け、サイト活用方法を理解することを目指します。

また、実際にオンライン FD コンテンツを使った FD プログラムを計画してみることで、実際にこれらのコンテンツを FD に活用する可能性についても検討していきたいと思います。

みなさまの参加をお待ちしております。

### 準備物・事前課題

各自ネットワークに接続可能なノート PC を用意し、当日持参してください。

### 主な受講対象者

・授業を改善するための情報や教材を探している教員、FD 企画・実践担当者

### 到達目標

1. サイト内のコンテンツを検索できる。
2. 各大学のオンライン FD コンテンツにアクセスできる。
3. オンライン FD コンテンツを使った FD プログラムを 1 つ提案できる。



# ルーブリック評価入門 ～考える、つくる、活用する～

俣野 秀典(高知大学 地域協働学部／学び創造センター 准教授)

## 講師略歴

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師などを経て、2024年より現職。放送大学非常勤講師(ファシリテーション入門)。

教育評価や教育方法を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。高等教育開発の専門家として、学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるワークショップの開発・支援・実施に携わる。2010年より担当している本プログラムは毎年最高水準の評価を得ている。関連する著書に『大学教員のためのルーブリック評価入門』(共訳、玉川大学出版部)がある。

## プログラム概要

成績評価について、多様な評価基準を設定することが求められています。ある大学の『シラバス入力手順説明書』では、“具体的な評価基準はルーブリック評価シートを事前に配布し、配点30点とする”との例が示されており、「ルーブリックって何??」と戸惑われた教員の方も多いと聞いております。

そこで本プログラムは、成績評価の目的・意義から出発して、高等教育において近年注目が集まっているルーブリック評価についての基本的な考え方を理解することを目的として実施されます。

※ルーブリックとは、「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、評価指標として活用されます。本プログラムでは、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクスからなる分析的ルーブリックを主に取り上げます。

※3日目午前に開講される「小グループ・ペア学習を取り入れた授業デザイン」において、本プログラムがどのように設計されているかについてもお話しします。協同型アクティブラーニングに興味がある方は受講をご検討ください。教員以外の参加者や再受講も歓迎します。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

- ・目標に準拠した評価方法を習得したい教員
- ・評価について関心のある教職員
- ・協同型アクティブラーニングを体験したい教職員

## 到達目標

1. 目標に準拠した評価を心がけることができる。
2. ルーブリック評価の意義を説明できる。
3. ルーブリックを授業で活用するための準備ができる。

# 自大学の FD を発展させるための評価と改善

上月 翔太（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 講師）

## 講師略歴

専門は高等教育論、西洋古典文学、未来思考。日本学術振興会特別研究員、大阪大学文学研究科助教、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室特任助教等を経て2023年より現職。愛媛大学、SPOD、教職員能力開発拠点における各種 FD（個別授業からカリキュラムまで）を幅広く手掛ける。『大学 FD 入門』『カリキュラムの編成』などの書籍の執筆にも携わる。

## プログラム概要

義務化を経て FD は多くの大学教職員にとって日常となりました。日常となったことで、FD のための取り組みが各大学の教育活動の改善に活かされている一方、さらなる発展に向けてどうすればよいか悩んでいる方もいるかもしれません。本プログラムはこれまでの自大学の FD をふりかえりつつ、次の打ち手を考える機会とします。具体的には「自大学の FD の評価」「研修から実践へ」「研修以外の方法」「FD の体系化」「カリキュラム改善の FD」「未来の大学の FD」の 6 つのテーマを扱います。FD 企画の発展編のような内容になりますが、FD 企画が初めての方にも基本をおさえることのできる内容に工夫しています。現行の FD を改善、発展させていくことに主眼が置かれますが、最後には大きく変貌する大学の未来像を予測し、今の FD に欠けている視点を参加者で議論し、FD について大局的に考えることも行います。

## 準備物・事前課題

教科書として中井俊樹他編（2024）『大学 FD 入門』（ナカニシヤ出版）を指定します。第1章と第2章を読んでいることを前提にプログラムを進めます。また、自大学における FD の取り組みについて、①何を行っているのか、②その成果は何か、③その課題は何かをまとめておいてください。

## 主な受講対象者

・教員の能力開発に関する企画等に携わっている教職員（経験年数は不問）。また、広く大学教職員の能力開発に関心をもつ人も歓迎します

## 到達目標

1. 自大学の FD の成果と課題をバランスよく説明できる。
2. 参加者の行動変容を促す FD の設計のポイントを上げることができる。
3. FD を通じた組織開発のポイントを上げることができる。
4. 未来の大学における FD を構想することができる。

# ケースを通して考える学生対応

清水 栄子(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授)

## 講師略歴

専門は高等教育、アカデミック・アドバイジング、学習支援、教職員能力開発。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了(博士(教育学))。国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師、愛媛大学教育企画室助教、講師、追手門学院大学共通教育機構准教授などを経て、2024年4月より現職。日本アカデミック・アドバイジング協会(JAAA)会長。著書に『大学の学習支援 Q&A』(共編著)、『アカデミック・アドバイジングーその専門性と実践ー日本の大学へのアメリカの示唆』(単著)がある。

## プログラム概要

大学に入学してから卒業するまでの間、学生は学習・生活・進路など、さまざまな課題や悩みに直面します。近年の全国調査では、大学生活において教員からの指導や支援を望む学生や、個別面談を希望する学生の割合が増加していることが報告されています。一方で、実際に教職員と接触する機会はそれほど多くないという現状も明らかになっており、そのような中でどのように学生対応を行えばよいのか、戸惑いを感じている教職員も少なくありません。

本プログラムでは、主に個別面談の場面を想定しながら、学生対応における基本的な視点や留意点について解説します。そのうえで、実際の事例を参考にしたシナリオ型ケースを用いたグループおよび全体でのディスカッションを通じて、参加者同士の経験や対応方針を共有し、多様な学生対応の在り方について理解を深めるとともに、ご自身の対応を振り返る機会としたいと考えています。

## 準備物・事前課題

学生対応のケースを検討するにあたり、ご自身の経験をもとに意見を出し合う場面があります。これまでに関わった学生との面談や相談対応について、簡単に説明できるようにしておいてください(詳細な記録や資料の準備は不要です)。

## 主な受講対象者

・学生との個別面談や相談対応に関わる教職員(例:クラス担任、学生支援、教務、キャリア支援などの担当部署の職員)

## 到達目標

1. 学生対応における基本的な視点と留意点を説明できる。
2. 実際のケースを通じて、適切な対応を提案できる。
3. 他者の視点や対応方針を共有し、自身の学生対応力を振り返ることができる。

# 合理的配慮とその学生支援について考える

坂井 聡(香川大学 バリアフリー支援室室長 教授)

## 講師略歴

専門は特別支援教育。1985年から香川県内の特別支援学校で勤務。2005年より香川大学教育学部助教授、2013年より教授。2014年にバリアフリー支援室の設立に携わり、現在室長。教育学部で特別支援教育を教え、バリアフリー支援室ではその運営。また教育学部附属特別支援学校の校長も併任している。言語聴覚士、公認心理師として学生、保護者、児童生徒の相談にも乗る。

## プログラム概要

合理的配慮は、障害のある学生が平等に教育を受ける権利を保障するために重要な役割を果たします。本プログラムでは、合理的配慮の基本的な概念、法的背景、具体的な実施方法について考えます。合理的配慮とは、障害者が他の者と平等に人権を享有し、行使するために必要な変更や調整を指します。これは、障害者権利条約や改正障害者差別解消法に基づき、大学が障害のある学生に対して行うべき義務となっています。

ここでは、本学における合理的配慮の申請プロセスや、学生との建設的対話の重要性についても触れます。参加者は、障害を社会モデルで考える体験をとおして、合理的配慮がなぜ必要なのかを考え、どのように合理的配慮を実施すればよいのかを考えます。本研修で参加者は合理的配慮の重要性を理解し、障害のある学生に対する支援をより効果的に行うための考え方を学びます。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

・障害のある学生の支援にかかわる教職員

## 到達目標

1. 合理的配慮について説明することができる。
2. 障害を社会モデルで説明することができる。



## 学生が安心して学びに向き合う大学の基盤づくり

### 講師

#### 森 朋子(桐蔭横浜大学 学長)

2020年度に桐蔭学園に着任。桐蔭横浜大学副学長を経て2022年度より現職。2024年度まで桐蔭学園小学校校長を併任。専門分野は高等教育における教学マネジメントと学習研究。ケルン大学哲学修士、大阪大学修士・博士(言語文化学)。今期は文科省第13期中央教育審議会委員、大学分科会質向上・質保証システム部会委員、大学設置・学校法人審議会特別委員、国大協事業実施委員会専門委員などを兼任。

#### 島田 くみこ(高知工科大学 学生支援部就職支援課 課長)

高知工科大学(現 高知県公立大学法人高知工科大学)に入職後、入試・広報、学生支援関係、法人本部総務企画課長、同法人高知県立大学教務・学生支援課長を経て2025年より現職。高知県立大学では、先生方や健康管理センターの職員等と協働しつつ学生支援に取り組んでいた。東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コース修士課程修了。日本高等教育学会所属。IDE現代の高等教育2017年6月号「大学職員の人材マネジメントに関する調査結果」を執筆。SPOD-SDCとして、主に大学職員を対象とした研修を実施。

#### 井ノ崎 敦子(徳島大学 キャンパスライフ健康支援センター総合相談部門 講師)

専門は臨床心理学。公認心理師・臨床心理士。2011年に徳島大学学生相談室助教を経て、2016年より現職。徳島大学での学生相談、職員相談、ハラスメント対応の従事するとともに、学生対象のグループワークの運営や学内での教職員向けのハラスメント研修内容作成を行っている。学生相談、DV や性暴力女性に対する暴力被害者支援などの論文多数。

### 指定討論者

#### 佐藤 浩章(東京大学 大学総合教育研究センター 教授)

専門は高等教育開発。博士(教育学)。愛媛大学大学教育総合センター教育システム開発部講師・准教授、教育・学生支援機構教育企画室准教授・副室長、大阪大学全学教育推進機構准教授、学際大学院機構教授を経て、2024年8月より現職。勤務校において、プレFDやTA研修の立ち上げを担当。

### 進行

#### 吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター 准教授)

### プログラム概要

現在の大学には、多様な学生が進学してきており、コロナ禍を経た学生の学習観の変化やAI技術の発展による教育のあり方、社会の価値観も多様化しています。大学教育における多様性への対応については、効率化ときめ細やかな支援の両方が議論される中で、学生個人の主体的な学習への取組や学生生活全般への取組が一層求められています。授業、教育プログラムの充実に加え、正課外での学習支援や学生支援も必要とされており、学習環境の観点からは「心理的安全性」の必要性も指摘されています。

本シンポジウムは「学生が安心して学びに向き合う大学の基盤づくり」と題し、誰もが安心して学

びに向き合うことができる大学をつくるために、教育や学生支援の実践を含め、大学としての基盤を作るために必要なことを議論します。はじめに、講師から現代の大学に求められている教育や支援の在り方について、社会の多様化や問題意識など、総論的な背景を話題提供していただきます。続いて、学生支援の現場で担当者として、専門家として実践されている講師から話題提供を行います。そして、各講師の報告に対する指定討論者からの質問や問題提起をうけて、各講師が回答・解説した後に、参加者のみなさんも交えて、テーマに関する議論を行います。大学等においてさまざまな立場で、それぞれの業務に携わっている教職員にとって、これからの日常業務の中で取り組むべきことを考える機会になるでしょう。

# デジタル学修歴証明書入門

鈴木 洋(芝浦工業大学 情報イノベーション部 部長)

## 講師略歴

1991年より芝浦工業大学に勤務。情報部門から2014年に教育イノベーション推進センター事務課に異動し、FDSD 支援、IR、教学マネジメント、学生支援等に携わる。2023年4月より現職。大学行政管理学会(JUAM)常務理事、SD コーディネーター。

## プログラム概要

諸外国に比べ、日本における学修歴のデジタル化は遅れていると言われています。しかし近年、ようやく日本においても学修歴のデジタル化が進み始めました。このプログラムでは、学修歴のデジタル化についての基本的な事項や、マイクロレデンシャルとデジタルバッジについて、諸外国との比較と日本における現状と課題などについて説明します。

実際のデジタル学修歴証明書の導入事例として、講師の所属機関である芝浦工業大学における導入から運用まで、また、実際の発行例などについて紹介し、参加者が、それぞれの課題を見だし、所属組織における学修歴のデジタル化に向けたヒントをつかめる事を期待しています。

皆様のご参加をおまちしています。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

・学修歴のデジタル化を推進したい教職員、DX 推進に携わる教職員

## 到達目標

1. デジタル学修歴について基本的な事項を説明することができる。
2. マイクロレデンシャルとデジタルバッジについての基本的な事項を説明することができる。
3. 所属組織におけるデジタル学修歴の導入と運用に向けた課題を示すことができる。

# 教学 IR におけるデータ分析入門

真鍋 亮(愛媛大学 教育・学生支援機構 特任助教)

## 講師略歴

専門は高等教育論および教育経済学。2003年に松山大学に事務職員として入職し、学務課、図書館、キャリアセンター、薬学部事務室、学生課、入試課などを経て2023年より現職。愛媛大学における IR、FD、SD を始めとした諸活動の企画、実施を担当。また、教職員能力開発拠点の活動として他機関における研修を行っている。IR をテーマとした研究論文を多数発表し、実務・研究の両面から IR に携わっている。

## プログラム概要

情報化社会が進展する現在において、高等教育機関が直面しているのは、これらのデータをどう有効活用し、教育の質を維持、向上させるかという課題です。こうした背景のもと、このプログラムでは、データを活用した教学の改善策を提供することで、高等教育の意義を再評価し、社会的な期待に応えるための方策について探求します。

参加者のみなさまには、基礎的なデータ分析のスキルを用いて教学 IR の実施方法に触れ、データに基づく意思決定支援ができることを目指します。さらに、高等教育が現代社会で果たす役割とその影響を深く掘り下げ、その価値について再検討します。専門用語や数式はほぼ使いません。講義、個人ワークなどを通じて学びを深め、データを活用した意思決定支援や高等教育の意義について、共有しませんか。

みなさまのご参加をお待ちしています。

## 準備物・事前課題

FDSD 動画(教学 IR 入門シリーズ5本)、学習支援動画(ゆるく学ぶ統計分析シリーズ7本)の視聴

## 主な受講対象者

・教学 IR や高等教育に関心のある教職員

## 到達目標

1. 教学 IR に必要となる、基本的なデータ分析手法を説明することができる。
2. 高等教育におけるデータを活用した意思決定支援について知る。
3. 高等教育の社会的意義を明確にし、教育の質を向上させるためのヒントを得る。



# 小グループ・ペア学習を取り入れた授業デザイン

俣野 秀典(高知大学 地域協働学部／学び創造センター 准教授)

## 講師略歴

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師などを経て、2024年より現職。放送大学非常勤講師(ファシリテーション入門)。

教育評価や教育方法を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。高等教育開発およびファシリテーションの専門家として、学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるワークショップの開発・支援・実施に携わる。学内外における研修を多数担当するほか、日本協同教育学会第16回大会実行委員長も務める。関連する著書に『アクティブラーニング批判的入門』(共著、ナカニシヤ出版)がある。

## プログラム概要

“学びのプロセスに学生自身がどれだけ関わることができたか”が学習成果を左右すると言われています。ここ数年、学生参加型や双方向型授業を謳う授業が増えてきていることの大きな理由がここにあります。

そこで本プログラムは、授業の活動性を高めるために、講義の一部にグループ学習やペア学習を取り入れてみたいと考えている／必要性を感じている教員を主な対象として、そのための考え方や方法を参加メンバーと共に学び、理解することを目的として実施されます。

※2日目午後に開講される「ルーブリック評価入門」は担当講師のファシリテーションによる協同型アクティブラーニングを実際に体験できる機会となっています。本プログラムと併せて参加することで、より理解が深まることが期待できます。教員以外の参加者や再受講も歓迎します。

## 準備物・事前課題

なし

## 主な受講対象者

- ・学生の学びを向上させるために、グループ・ペア学習を授業の一部に取り入れたい教員
- ・アクティブラーニングの基礎理論や技法を知りたい教職員

## 到達目標

1. グループでの活動による学習の効果を説明できる。
2. 協同的な学習活動を生産的なものにするための要件について二つ以上説明できる。
3. 学生を参加させるための技法を目的に応じて選択できる。

# 指導補助者(TA)研修・プレFDプログラムをどう立ち上げるか？

佐藤 浩章(東京大学 大学総合教育研究センター 教授)

## 講師略歴

専門は高等教育開発。博士(教育学)。愛媛大学大学教育総合センター教育システム開発部講師・准教授、教育・学生支援機構教育企画室准教授・副室長、大阪大学全学教育推進機構准教授、学際大学院機構教授を経て、2024年8月より現職。勤務校において、プレFDやTA研修の立ち上げを担当。

## プログラム概要

2019年の大学院設置基準の改正により、博士後期課程の学生に対するプレFDの実施や情報提供が努力義務化されました。さらに、2022年の改正では、指導補助者(TA)への研修義務化や授業科目の一部担当が可能となるなど、プレFDの重要性が一層強調されています。

このプログラムでは、各大学で指導補助者(TA)やプレFDをどのように立ち上げるのかについて、法的根拠や実施の意義、ならびに先進大学における実践事例をもとに学びます。具体的な内容や教材もご覧いただけます。参加者は、所属大学の実践の特徴と課題を抽出したあと、立ち上げのヒントを見出すことになるでしょう。

所属大学の事例について事前に調べていただき、可能であれば関連資料を持参いただき、ディスカッションに参加ください。所属大学においてこれらの取り組みが未実施であっても構いません。また現段階では、担当者が不在の場合、他部署の教職員が参加されても構いません。

## 準備物・事前課題

所属大学の指導補助者(TA)研修、プレFDプログラムの実態がわかる関連資料があれば持参する。ない場合も事前に情報を入手しておくことが望ましい。

## 主な受講対象者

・指導補助者(TA)研修やプレFDに関わる教職員

## 到達目標

1. 指導補助者(TA)研修・プレFDの必要性について学内教職員向けに説明することができる。
2. 先進大学における指導補助者(TA)研修・プレFDの実態を説明することができる。
3. 所属組織の指導補助者(TA)研修・プレFDの特徴と課題を抽出することができる。
4. 所属大学において指導補助者(TA)研修・プレFDを立ち上げるためのヒントを見出すことができる。

# Excel ではじめる統計分析

飯尾 健(徳島大学 高等教育研究センター 助教)

## 講師略歴

令和2年3月京都大学大学院教育学研究科博士後期課程研究指導認定退学、博士(教育学)。京都大学高等教育研究開発推進センター研究員を経て、令和2年9月より現職。専門は情報リテラシー、学習評価。

## プログラム概要

教学 IR では、どのような形であれ統計分析を行うこととなります。統計分析にはさまざまな方法がありますが、それぞれの方法の性質を踏まえて目的に合わせた分析方法を採る必要があります。

このプログラムでは、Excel ならびに Excel 上で動作する統計分析ソフト"HAD"を用いて、実際にサンプルとなるデータを使って分析ワークを行いながら統計分析の方法を学んでいきます。また、グループワークとして分析結果を他者に説明することで、分析結果を正しく読み取り伝えられることも目指していきます。

プログラムにご参加する方は、Excel や HAD をあらかじめご自身のノート PC にインストールしていただき、各自ご持参ください。同時にサンプルデータのダウンロード等ができるよう、PC には Wi-Fi 等のインターネットにつながるようにご準備ください。

みなさまのご参加をお待ちしております。

## 準備物・事前課題

各自ノート PC および Wi-Fi 環境を準備すること

HAD を公式サイト(<https://norimune.net/had>)からダウンロードし、自分の PC で使えるようにしておくこと

## 主な受講対象者

・教学 IR 担当者のほか、自身の教育や研究に HAD を使って統計分析(推測統計)を始めてみたい教職員

## 到達目標

1. Excel を使った記述統計を実施できる。
2. Excel (HAD) を使った推測統計を実施できる。
3. 統計分析の結果を正しく他者に説明できる。

## 実践事例から考えるキャリア支援

原 瑞穂(香川大学 キャリア支援センター 特命准教授)

圖子 賀津美(香川大学 教育・学生支援部次長/学生生活支援課長(併) )

篠原 佳代(香川大学 教育・学生支援部キャリア支援課長)

### 講師略歴

【原 瑞穂】専門はキャリア教育、キャリア支援。2016年に山梨大学キャリアセンター特任教授を経て2021年より現職。香川大学のキャリア教育の質向上に向けた教育プログラムの企画、実施、評価に加え、キャリア支援センターの業務に関わる。

【圖子 賀津美】香川大学において、修学支援課、キャリア支援課、学生生活支援課等の学生支援を中心とした業務に携わる。

【篠原 佳代】香川大学において、キャリア支援課、国際課、学生生活支援課等の学生支援を中心とした業務に携わる。

### プログラム概要

大学のキャリア支援はキャリア教育と就職支援の大きく2つから成り立っています。学生の主体的なキャリア形成活動につなげるには、この2つがうまく連携し継続して行われることが必要となります。本学では、キャリア支援センター教員が行うキャリア科目とキャリア支援センターが実施する各種ガイダンス等とキャリア相談を柱として、その役目を担っています。

このプログラムでは、キャリア支援センターの実践事例を紹介することで、最近の学生の現状に添ったキャリア支援のあり方について、一緒に考えていきます。

参加者のみなさまには、所属大学の学生のキャリア観や就職活動の様子をもとに、ディスカッションやグループワークなどの活動に積極的にご参加いただくことを期待しております。

### 準備物・事前課題

なし

### 主な受講対象者

・学生のキャリア支援に興味のある教職員

### 到達目標

1. 大学のキャリア支援とはどのようなものか、説明することができる。
2. 大学が抱えるキャリア支援の方策について、課題を共有し、解決のヒントを共有することができる。



## 40代からのキャリアデザイン:リスキリングで未来を拓く

久保 秀二(愛媛大学 地域協働支援部 部長)

石川 尚(愛媛大学 教育学生支援部 教育企画課長)

### 講師略歴

【久保 秀二】平成7年愛媛大学事務職員に採用。これまで高知大学、弓削商船高等専門学校に出向、愛媛大学にて医学部人事労務課長、総務部人事課長、総務部次長を経て、令和7年4月より地域協働支援部長。社会保険労務士、国家資格キャリアコンサルタント等の資格を有し、大学職員向け研修の講師や SD コーディネーターとしても活動。SPOD-SD 専門部会長、愛媛大学認定研修講師。

【石川 尚】平成15年高知工業高等専門学校事務職員に採用。これまで(独)国立高等専門学校機構職員、愛媛大学で勤務。愛媛大学では教育学生支援部教育企画課、総務部総務課、人事課、学長秘書室で業務に従事し、令和7年4月から現職。令和元年に SPOD-SDC を取得。

### プログラム概要

急激に進む少子高齢化や、大学を取り巻く環境の複雑化・不確実化により、大学職員にも従来の「安定型キャリア」ではなく、自律的で柔軟なキャリア形成が求められるようになっていきます。特に40代以降の職員にとっては、これまでの経験を活かしつつ、新たな役割やスキルを身につけていく「リスキリング(学び直し)」が重要なテーマとなっています。

本プログラムでは、大学職員としてのキャリアを中長期的にどのように築いていくかを考えます。自身のキャリアの棚卸しを行い、強みや課題を見つめ直したうえで、これから必要とされるスキルや学びの方向性を明確にし、今後のキャリアに向けた行動目標の言語化に取り組みます。

「人生100年時代」を自分らしく切り拓くために、ぜひ一緒にキャリアと向き合ってみませんか？

皆様のご参加をお待ちしています。

### 準備物・事前課題

なし

### 主な受講対象者

・自分のキャリア形成やリスキリングに興味のある中堅以上の大学職員

### 到達目標

1. 自分のキャリアの現状と課題を明確にし、今後の方向性を説明できる。
2. リスキリングの重要性を理解し、自分に必要なスキルを習得するための具体的な計画を立てられる。
3. 大学職員として、キャリア形成における主体的な姿勢を持つ。

# 自分の成長につながる自己啓発を考えよう

藤本 正己(山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室 講師)  
杉原 康弘(松山大学 学生部学生支援課 係長)

## 講師略歴

【藤本正己】専門は高等教育論。2008年に徳島文理大学に大学職員として入職後、情報センターで学内システムの運用・管理の業務、教務部教務課において入試業務を担当。2022年1月に愛媛大学教育企画室特定研究員、特任助教を経て、2023年4月より現職。現在は FD・SD・IRの業務を行っている。愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室プロジェクトフェロー。

【杉原康弘】大学卒業後は民間企業に勤務し、2010年に松山大学に事務職員として入職。入試課、教務課、経営企画課を経て、2025年4月より現職。SPOD 次世代リーダー養成ゼミナール修了生(第7期)。四国地区大学教職員能力開発ネットワーク スタッフ・ディベロップメント・コーディネーター(SPOD - SDC)。桜美林大学大学院大学アドミニストレーション専攻(通信教育課程)修了。修士(大学アドミニストレーション)。

## プログラム概要

近年、大学業務の高度化・複雑化によって、大学職員が果たすべき役割は大きくなっています。大学職員の活躍がこれまで以上に期待される中で、大学は SD などを通じ、大学職員の能力開発を促しています。

大学職員の能力開発には、大学が実施する組織的な取組の他に、個人による取組があります。個人による能力開発は「自己啓発」と呼ばれ、様々な方法で行われています。大学改革が進められる中で、個人で能力開発を進めることが可能な自己啓発は、今後ますます重要性を増していくことでしょう。

このプログラムでは、自己啓発における目標設定の重要性やセルフマネジメントの方法について確認するとともに、参加者個々の成長につながる自己啓発について考えていきます。

参加者のみなさまには、個人ワークやグループワークなどの活動に積極的に参加いただくことを期待しています。

## 準備物・事前課題

指定するオンデマンド教材の視聴

「5年後、どのような大学職員になりたいか」について、その理由とともに考える

## 主な受講対象者

- ・入職後5年目から10年目までの大学職員
- ・自己啓発に興味のある若手の大学職員

## 到達目標

1. 自己啓発における目標設定の重要性を説明できる。
2. 自己啓発におけるセルフマネジメントや習慣化の手法を説明できる。
3. 自分の成長につながる自己啓発を計画することができる。

## 電子テキスト型コンテンツの制作と授業運用

林 敏浩(香川大学 副理事、情報化推進統合拠点 拠点長、大学教育基盤センター 副センター長、創造工学部(兼務) 教授)

### 講師略歴

平成元年3月徳島大学工学部情報工学科卒業、平成6年徳島大学にて博士(工学)の学位取得。平成6年より佐賀大学理工学部講師、平成17年より香川大学総合情報基盤センター准教授、平成25年より香川大学 総合情報センター(現在、情報化推進統合拠点・教育情報推進支援センター)教授。教育工学を専門として、大学全体の教育支援システムを含むコンピュータ・ネットワークシステムの導入、運用、管理、利活用支援まで広範に担当。

### プログラム概要

コロナ禍に対する対面授業の代替手段として多くの教育機関で e-Learning が採用されました。このような授業実施の経験を踏まえ、対面授業との併用を前提として e-Learning の利活用が今後も進むと考えられます。そのような利活用では、対面授業にない e-Learning の特徴を生かすことが肝要です。例えば、時間割や場所に拘束されないので、学生の学びの機会を増やせます。一方、オンデマンド型 e-Learning では動画教材コンテンツの作成や改修の負荷が高く、実施のハードルになる場合があります。このような問題に対して本講師は2018年度より電子テキスト型 e-Learning コンテンツを制作して、それを用いてオンデマンド型 e-Learning を運用しています。この授業実践に基づいて、本授業では、授業理念、設計、運用、実施に有用なノウハウなどについて情報共有したいと思います。

### 準備物・事前課題

特にありません

### 主な受講対象者

・オンライン授業(特にオンデマンド型 e-Learning)の設計や実施に関わる教職員

### 到達目標

1. e-Learning の利点、欠点を説明できる。
2. オンデマンド型 e-Learning の学習コンテンツの種類を説明できる。
3. 電子テキスト型 e-Learning コンテンツの利点と欠点を説明できる。



# 大学生をリフレクティブラーナーとして育てる

上田 勇仁(帝京大学 高等教育開発センター 助教)

## 講師略歴

愛媛大学法文学部在学中、スチューデント・キャンパス・ボランティア(SCV)や愛媛大学リーダーズ・スクール(ELS)に参加し、大学教育に興味を持つ。大阪大学大学院博士後期課程修了。博士(人間科学)。専門は大学教育および教育工学。大手金融機関向け e-learning 教材制作会社勤務後、大正大学専門職職員(FD 担当)を経て、2017年に徳島大学高等教育開発センターに特任助教、2019年に厚生労働省が所管する職業能力開発総合大学校に特任助教として勤務し、2025年4月より現職。帝京大学の FD プログラムや初年次教育科目「教育学」などを担当している。

## プログラム概要

大学教育において、リフレクションが注目されています。リフレクションとは、自身の経験や行動を振り返り見つめ直すことで、実習授業での報告書やプロジェクト学習の報告会もリフレクションとして捉えることができます。また、就職活動においてエントリーシートを記述したり、カリキュラムを通じて何を学んだか記述する学習ポートフォリオもリフレクションとして捉えることができます。リフレクションを通じて、獲得した学習内容やスキルを言語化することができますが、学習者によっては断片的な思考に終始してしまい、うまくリフレクションできないこともあります。

このプログラムでは、リフレクションが得意な大学生(=リフレクティブラーナー)を育てていくために、リフレクションの方法やリフレクションを促す「問い」について講義やワークを通じて理解を深めていくことを目的としています。

## 準備物・事前課題

持参物: 学生の到達目標が記されたテキスト(例: 授業のシラバス、所属大学のディプロマ・ポリシーなど)

## 主な受講対象者

- ・これから教育活動にリフレクションを取り入れたい教職員
- ・実習、プロジェクト学習、サービスラーニングなど経験を中心とする授業を担当している教員
- ・就職活動の助言指導に関わっている教職員
- ・ポートフォリオに関わっている教職員

## 到達目標

1. 大学生のリフレクションを支援するための理論的な枠組みを説明することができる。
2. 授業や学士課程教育における教育目標を参照し、リフレクションの方針を記述することができる。
3. リフレクションの方針に則して、リフレクションを促すための問いを記述することができる。
4. 参加者同士の積極的なコミュニケーションに貢献することができる。



# テキストマイニング入門

塩川 奈々美(徳島大学 高等教育研究センター 教育の質保証支援室 助教)

## 講師略歴

徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻地域創生分野博士後期課程修了。博士(学術)。専門は日本語学および方言学。2018年に徳島大学総合教育研究センター(現:高等教育研究センター)教育改革推進部門特任助教を経て、2020年4月より現職。同センター教育改革推進部門(兼任)。FD 担当として徳島大学における全学 FD プログラムの企画・運営・調査研究に携わり、支援業務に取り組むほか、学生アンケートや教員アンケートなどの教学アンケートにおける自由記述についてテキストマイニングを活用した質的分析に取り組む。

## プログラム概要

皆さんは授業評価アンケート等で回収した自由記述の回答をどのように処理していますか。自由記述の内容をトピック毎にまとめたり、一覧化するに留まっているものも多いのではないのでしょうか。こうした手作業による集計は少ない件数であれば有効な手段となりますが、膨大な件数の回答や、属性別の傾向を捉えたい時等、条件や状況によって処理できる量にも限界があります。

そこで、本プログラムでは KH Coder を利用したテキストマイニングについてその方法や事例紹介を行いつつ、実際に参加者の皆さんに体験してもらうことにより、テキストマイニングの基礎を学んでいただくことを目指します。

データ整理の方法や注意点、ソフトの使い方、図の読み方などの基本を押さえ、どのように活用することができるのか一緒に探っていきましょう。

## 準備物・事前課題

事前にテキストマイニングソフト・KH Coder をインストールした PC をご持参ください。インストール方法を示したマニュアルを事前に配付しますので、各自インストールをしてきてください。

## 主な受講対象者

・アンケートの自由記述やテキストデータを活用した分析に関心がある教職員。基礎的な内容となりますため、主に初級者の方を対象とします。

## 到達目標

1. テキストデータの特徴や取り扱う際の注意点を理解し、説明することができる。
2. テキストマイニングソフト「KH Coder」の基本操作を行うことができる。
3. テキストマイニングソフト「KH Coder」を利用して作成した図から解釈を行うことができる。
4. 学んだ方法をもとに、自身の業務での活用案を提案することができる。

## 組織的な学習支援について考えてみよう

清水 栄子(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 准教授)

石田 明菜(立命館大学学生部(BKC)特定業務専門職員 SSP コーディネーター)

### 講師略歴

【清水 栄子】専門は高等教育、アカデミック・アドバイジング、学習支援、教職員能力開発。広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了(博士(教育学))。国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師、愛媛大学教育企画室助教、講師、追手門学院大学共通教育機構准教授などを経て、2024年4月より現職。日本アカデミック・アドバイジング協会(JAAA)会長。著書に『大学の学習支援 Q&A』(共編著)、『アカデミック・アドバイジングーその専門性と実践ー日本の大学へのアメリカの示唆』(単著)がある。

【石田 明菜】臨床心理士・公認心理士として、東邦大学大森病院など医療機関や武蔵野市教育センターなど教育機関で勤務。カウンセリング・発達検査・学校巡回などの業務を経て、2017年度より立命館大学で StudentSuccessProgram のコーディネーターとして立ち上げから関わる。

### プログラム概要

多様な学生を受け入れる高等教育機関において、学習支援は重要な役割を担っています。しかしその範囲は広く、学生のニーズに応じた支援を行うには、各大学の文脈に即した組織的な対応が求められます。本プログラムでは、学習支援を「学生の学習に関わる課題解決の支援を、個別および組織的に提供する活動」と捉え、参加者同士でその意義やあり方を考える機会とします。まず、学習支援の背景や意義について講義を行い、各大学の取組みや課題をグループで共有します。立命館大学の StudentSuccessProgram (SSP) の事例も紹介しながら、ディスカッションやワークを通じて組織的な支援の可能性と実践をともに探ります。参加者には、所属機関の学習支援体制を紹介できるよう準備いただき、積極的かつ建設的な参加を期待します。

### 準備物・事前課題

所属大学における学習支援の体制・取組みについて紹介できるように準備をしておいてください。

### 主な受講対象者

- ・所属大学の学習支援に課題を感じている教職員
- ・学習支援に興味・関心がある教職員

### 到達目標

1. 高等教育における学習支援の定義とその必要性を、自身の言葉で説明できる。
2. 所属大学における学習支援の体制・取組み・課題の現状を説明できる。
3. 所属大学の学習支援における組織的な課題と特徴を整理し、言語化できる。
4. 意見交換や活動を通して、参加者同士が学び合う雰囲気づくりに貢献できる。